

『異邦人』への道

作家カミュの誕生（上）

奈 蔵 正 之

人の作品とは、芸術という回り道を通して、心のかつて開いたあの2つか3つの、素朴だが偉大なイメージを再び見いだすという、長い道のりにほかならない。（カミュ、『裏と表』への序文¹⁾）

序

デビュー作がそのまま代表作となったことは、作家アルベール・カミュの栄光と悲劇を象徴する出来事だろう。だが作家の死後40年近くを経た現在、その作品の中から一つを選ぶということになれば、やはり小説『異邦人』であり、また同時に、『異邦人』が20世紀フランス文学を代表する作品の一つであることもまちがいはない。

カミュには、ライフワークと自ら呼ぶ作品を仕上げる時間が与えられなかった。作家としての成熟にすら、おそらくは達しないうちに、不慮の事故によって創作の道を断たれてしまった。

小説 演劇 エッセイの3つの分野で同時に活躍したいという願いを抱いていたカミュではあるが²⁾、生前から評価はあまり芳しくなかった4つの演劇作品は、今日、舞台にかけられることはほとんどない。『カリギュラ』、『誤解』、『戒厳令』、『正義の人々』の4作は、上演という形で命を得る機会を失い、なによりもテキストとして、カミュ的世界を探る営みにおいて小説と同じような扱いを受けている。生前のカミュが実存主義の旗手の一人であるという誤解を受ける理由の一つとなった『シーシュポスの神話』は、哲学的著作という点では例えばサルトルの諸著作とは比べるすべもなく、パセティックな文体とイメージに満ちた文学的作品と捉えるべきであろう。1950年代のフランス知識人界においてカミュがほとんど「抹殺」される原因をもたらした政治的エッセイ『反抗する人間』は³⁾、東西冷戦の崩壊と、「社会主義」の仮面をかぶったさまざまな政治的抑圧体制の実態が次々と暴かれたことにより、今にして、その先見性が見直され、「50年代冷戦下における政治的覚醒者・先見者カミュ」という評価はこの10年あまり高まる一方であるが、それだけに一層、1950年代という時代的コンテクストを外して1編の著作として評価すると、構成が不十分な点と時に論理が曖昧な点が目立つ。

『反抗する人間』におけるように時代の刻印を免れえないというのは、いつの世の文学者にも課せられた運命ではあるが、20世紀の兩次大戦間および戦後の冷戦下を活躍の舞台にした作家達には、過酷な定めとなった。サルトルにしてからが、その大作『自由への道』は、ほとんど現代的な意義は失っている。カミュの生前もっとも大衆的な人気を博し、ノーベル文学賞を1957年に授与される大きな理由となった小説『ペスト』は、ドイツ軍占領下における抑圧とそれに対する抵抗運動の記憶を重ねてこそ生き生きとしたイメージを伴ってフランスの読者に迫ってきた作品であり、そのような時代的地域的コンテクストを外してまでも、「監禁状況に置かれた人々の団結と抵抗」というテーマについて、ペストという象徴を通じて普遍的なアレゴリーとして読むことが可能かということ、現在ではかなり厳しいものがある。現代人の有罪性という深いテーマを掘り下げた中編『転落』は、しかしながらその有罪性の追及と無垢への渴望が、50年代におけるカミュの個人的苦悩をあまりに直接に反映しており、例えばカミュが生涯敬愛したドストエフスキーの諸傑作におけるように、ロシア的土着イメージを出発点としながらも普遍的な人間の悪のテーマにまで辿り着くような発展性は獲得していない。晩年の短編集『追放と王国』は、1950年代に創作力の低下に苦しんだカミュが、作家としての再生を模索しつつ取り組んださまざまな実験的試みの成果であり、その再生を果たせぬままに作家が事故死してしまった以上、決定的な評価を下すことは難しい。

今日カミュの諸作品には、時代状況的コンテクストに位置づけて捉えてゆくか、その困難な時代を誠実な表現者として生き抜いたカミュの想像界とメッセージの総体を把握するために相互に関連づけて探索するか、どちらかの読み方しか残されていないと述べても過言ではあるまい。ただ1作を除いては。

『異邦人』こそは、時代状況的刻印を視野に入れなくても、また作家カミュの存在を捨象しても、独立した作品としてのステイタスを失うことのない傑作であろう。それまでのフランス小説における語りの構造の黙契を破壊し尽くした文体上の実験として。太陽のせいで殺人を犯した「無垢の殺人者」が、自己に忠実であるかぎり社会との乖離を強いられるという矛盾のうちに、死刑囚として不条理と直面する物語として。さらには一つの批評を下すことがさらなる批評の矛盾を生み、その結果絶えざる批評が可能になるという、奇跡的な「開かれた作品」として。

だがどうして、このような作品が可能となったのだろうか？ 定評を得た作家の代表作を前にしたとき、たとえそれが初期の作品であっても、我々は遡及的に、あるいは予定調和的に捉えがちである。作家の全作品を前提として、このような特色を持ちことうというテーマを追及した作家であるから、こうした作品を著したのであると。だが作家というのは、まさしく書くこと「エクリチュール」を通じて文体を創出し、テーマを発見していく存在ではなからうか？ 『赤と黒』を執筆したスタンダールと、『パルムの僧院』を著したスタンダールは、厳密に言って同じ存在ではあり得ない。まして『異邦人』の場合、パリの文壇とも知識人界とも縁もゆかりもなかったアルジェリア出身の貧しい青年が書きつづった小説デビュー作である。『異邦人』以前のカミュは、2つのエッセイ集をアルジェリアで出版していたとはいえ⁴、まだ「作家」ですらなかった。あらかじめ不条理のテーマ

と文体上の実験というテーゼがこの一青年の中に胚胎されており、その小説上の実践として予定調和的に『異邦人』を著したという思い込みは、事実とも創作の本質ともかけ離れた評価となる。『異邦人』という作品がどのような経過を辿って生み出されてきたかという探求は、作家カミュがどのようにして誕生したかという秘密に迫る、重要な研究テーマといえるだろう。

ところが、このようにカミュを代表する作品でありながら、また、それゆえ数多くの研究が著されながら、『異邦人』の成立について論じたものは極めて少ない。極言するなら、1962年に出版され、今もカミュの小説テキストを論じるときの底本とされているプレイヤッド版の「演劇・小説編」において校訂者ロジェ・キヨ Roger Quillot が『異邦人』の解題で述べている事柄から、30数年を経た現在もほとんど一歩も出ていないという状況である⁵⁾。

その理由の一つは、カミュの死後の批評界の主流が、いわゆる「ヌーヴェルクリティック」で占められ、その流れを汲む研究者達が、『異邦人』のテキストがどのような構造を取りどのような意味を生み出しているかという、「読み」に限定した研究を行ってきたことによるだろう。言い換えるなら、作家カミュという存在を捨象したとしても成り立つ批評・研究の立場による分析である。もう一つの理由は、資料の決定的不足であり、『異邦人』の場合は、カミュの他の作品と比べてもそれが目立つ。むしろ、作家の死後しばらくは公開されない資料が多いという事情はあるが、『異邦人』においては、プレイヤッド版テキストの校訂者キヨが参照した2種類の原稿以外に草稿の存在はない。また執筆そのものに長い時間をかけて何度も書き直したわけではなく、ごく短期間に集中して執筆されたらしく、実際に草稿に当たったとしても、着想の初期の段階から初稿を経て決定稿に至る過程を分析して作品の成立過程を論じるという、いわゆる「生成研究」は『異邦人』においては不可能に近い。

本論は、こうした資料不足は前提としたうえで、一方でこれまで明らかになっている伝記上の事実をできるだけ厳密に押さえつつ、他方で、『異邦人』に先行するテキストを時代的に厳密に位置づけながら相互に参照するという手法で『異邦人』成立過程の秘密に少しでも迫ろうという試みである。というのも、カミュのエクリチュールの特色として、何度も推敲して文章を鍛え上げるのではなく、自己の内部でイメージと表現が一致する「特権的瞬間」を待ち続け、その瞬間が来るや一気にテキスト化し、いったん記したテキストにはフェティシスティックなまでにこだわり、その後ほとんど変更を加えることなく、作品の中に利用していくという点があるからである。同一のテキストが異なった文章・作品の中で引用されている、いわゆる「作家内テキスト同一性」から、それゆえカミュの場合は、かなり重要な議論が行えるのである⁶⁾。

さまざまな創作的試みにあるいは手を染めあるいは挫折をしながら、若きカミュが『異邦人』を着想してゆく過程がどのように状況証拠から跡付けられるか、言い換えるなら、作者の創造的歩みを追体験する批評が可能かどうかを問うていきたい。

なお、上下を通じての全体的構成は次のようになる予定である。

1. 『異邦人』着想をめぐる謎
 - 1-1. 『異邦人』の執筆時期
 - 1-2. 『ノート』に現れた資料
 - 1-3. 『幸福な死』と『異邦人』
2. 『幸福な死』の成立過程
 - 2-1. 『ノート』をめぐる謎
 - 2-2. 『幸福な死』の着想
 - 2-3. 『幸福な死』の構想
 - 2-4. 『幸福な死』の執筆と断念
3. 妄執としてのテーマ(1) 生い立ちと母親
4. 妄執としてのテーマ(2) 裏切られた愛
5. 妄執としてのテーマ(3) 幸福の探究
6. 妄執としてのテーマ(4) 死と転生
7. メルソーからムルソーへ
8. 『異邦人』の成立

1. 『異邦人』着想をめぐる謎

1-1. 『異邦人』の執筆時期

『異邦人』に関する総合的批評を試みた作家ベルナール・パンゴーは、この小説の執筆にカミュが長い時間をかけたという説に反駁して次のように述べた。「『異邦人』は短期間に一気に呵成に執筆されたはずである。これが長い期間に何度も推敲された作品だとは考えられない。文体上の統一感から言って、そのようなことがあったはずはない¹⁾」。作家ならでの審美感に基づくこの主張は、『異邦人』の自然な読みによりうなずけるものだろう。通常のフランス小説が、物語がすべて終わった時点で仮想的な語り手によって単純過去形を用いて語られるという語りの構造を備えているのに対し、『異邦人』においては、事柄は生起する順番に複合過去形を用いて語られ、それゆえ語りの時点がいつに位置づけられるのか絶えず変動するという幻惑感を覚えるわけであるが²⁾、こうした実験的試みに基づく文体の統一は、長期にわたって書き継がれた場合に保つのは難しい。

コンピュータによるごく初歩的な定量的分析によっても、『異邦人』における文体の均質性が裏付けられる。例えば『異邦人』のテキストは合計で34,447個の単語、2,232個の文で成り立っているが、各章ごとに1文を構成する単語数の平均値を取ると、次の表のように、14～16の幅に収まる章がほとんどであることがわかる³⁾。これは、各章が時間をおいて書き継がれたのではなく、短時間のうちに続けて執筆されたことを物語る証拠の一つと言えるだろう（なお、妻のフランシーヌに宛てた

カミュの書簡によれば、第1部第1章だけは他の部分より1年くらい早く書かれていたということで、それがこの章の数値が際立って低い理由なのかもしれない。また、第2部第3章・4章の数値が高いのは、主人公による間接話法の文が多用されているためで、「Il a dit que...」といった主語＋導入動詞＋接続詞の分、単語数が増えてしまうのである。

【表1】

	I-1	I-2	I-3	I-4	I-5	I-6	II-1	II-2	II-3	II-4	II-5	平均
単語数	4637	1782	2821	1892	1971	4028	2525	2873	4721	2793	4404	3131.5
文数	351	114	201	133	120	262	160	185	260	162	284	202.9
一文あたり語数	13.21	15.63	14.03	14.23	16.43	15.37	15.78	15.53	18.16	17.24	15.51	15.43

プレイヤッド版において『異邦人』を校訂したロジェ・キヨによれば、『異邦人』の草稿は二種類が残されており、「草稿1」は全体が手書きで書かれ、「草稿2」は最初の3分の1がタイプされ残りは手書きの状態となっているが、「草稿1」と「草稿2」の内容に大きな変化はない⁴⁾。また、草稿と決定稿の間に大きな相違がないことは、プレイヤッド版の解題に挙げられたヴァリエントを検討しても明らかであり、興味深いヴァリエントは散見されるものの、『異邦人』の成立論を左右するほどのものは認められない。さらに、『異邦人』の構想のためのメモや、各場面の下書きのようなものも、後述する『ノート』におけるわずかな記述を除けば発見されておらず、『異邦人』の執筆にあたって、カミュは、ほとんど直書きのような形でテキストを紡ぎだし、その修正は最小限にとどめたようである。このような執筆方法が可能になるのは、短期間に集中して取り組んだ場合に限られるだろう。

『異邦人』は1942年6月15日、占領下のフランスにおいて初版4,400部で出版された。だが実際の執筆が終了したのは、さまざまな状況証拠から、カミュ自身が『ノート』に記しているように、1940年5月と考えられる⁵⁾。出版まで2年間に要したのは、『異邦人』の脱稿直後にパリがドイツ軍により占領され、パリを脱出したカミュがクレルモン＝フェラン、リヨン、アルジェリアのオランと次々と居を移したこと、そうした状況ではアルジェリアとフランス本国との間で連絡に手間がかかったこと、また、占領下の出版状況が極めて厳しい状況にあったことなどの事情による。

『異邦人』脱稿に先立つ1940年1月、カミュがそれまで精力的な記者として活動していたアルジェリアの日刊紙「ソワール・レピュブリカン」*Soir Républicain*は、その反戦的立場ゆえに当局から発禁処分を受ける。次の職を求めて奔走した貧しきカミュは、パリの日刊紙「パリ・ソワール」*Paris Soir*に勤めることになり、3月下旬にパリに到着してホテル住まいを始める。一つには「ソワール・レピュブリカン」の頃とは異なり時間的余裕ができたことから、二つには環境の変化による刺激から⁶⁾、それまでカミュの想像界で着想されていたこの作品のテーマが一挙に文章の形を取り、1940年の1月から5月にかけて、とりわけその主要部分は3月以降パリにおいて、『異邦人』は書き

上げられたのではないだろうか⁷⁾。

1-2.『ノート』に現れた資料

執筆時期の厳密な特定は、草稿の紙質やインクの質といった物質的な鑑定を経なければ結論を見ないことではあるが、文学批評にとって重要なのは、執筆時期そのものよりも、作家の想像界においてどのようにして作品が着想され構想を整えていったかという過程の解明である。ところが『異邦人』の場合、この点に関する研究は極めて難しい状況にある。

上述のように、『異邦人』の成立過程の証拠となる物質的資料は極めて乏しい。『異邦人』がブルーストの『失われたときを求めて』のように膨大な資料が残されている作品だったなら、あるいはフロベールの『感情教育』のように決定稿とは似ても似つかない「初稿」の存在する作品だったなら、作品の構想過程を巡る実証的研究が可能であっただろう。しかし『異邦人』の場合、直接間接に関わりを持つと考えられる先行テキストとしては、カミュの『ノート』におけるわずか12篇の断章がそのほとんどなのである⁸⁾。

- 『ノート 1-1』断章03(P.37)(1936年)「トラックの後を走る若者の姿」
(『異邦人』第1部第3章に關係)
- 『ノート 1-1』断章06(P.46)(1937年4月)「自らを正当化しない人物」
(ムルソーの人物像との一部共通点)
- 『ノート 1-1』断章7(P.49)「死刑囚と司祭」(1937年6月)
(『異邦人』最終章との関わり)
- 『ノート 1-2』断章06(P.110)(1938年5月)「老人ホームで死んだ老女の話」
(『異邦人』冒頭のエピソードの原形)
- 『ノート 1-2』断章09(P.122)(1938年8月)「アラブ人の娼婦とその情夫の話」
(レモン・サンテスのエピソードの原形)
- 『ノート 1-2』断章09(P.124)(1938年8月)「老人ホームで死んだ老女の話」
(『異邦人』冒頭のエピソードの原形)
- 『ノート 1-2』断章10(P.129)(1938年11月?)「施設で死んだ母親」
(冒頭の文章を始め、その後『異邦人』の第1部第1章でほぼそのまま用いられることになる断片が4つ)
- 『ノート 1-2』断章13(P.141)(1938年11月?)「死刑囚のモノローグ」
(その後『シーシュポスの神話』の冒頭に用いられる断片と、『異邦人』最終章のエピソードの原形が連なって現われる、極めて重要な断章)
- 『ノート 1-2』断章15(P.151)(1939年4月)「立ち回りについて語る男」
(その後レモン・サンテスのせりふで用いられる断片)

- 『ノート1-3』断章011(P.159)(1939年4月)「養子を虐待した男の話」
(サラマノの人物像の原形)
- 『ノート1-3』断章105(P.198)(1940年1月)「老人と犬、ある男の口癖」
(サラマノとマッソンのエピソード)
- 『ノート1-3』断章111(P.203)(1940年3月)「海辺の描写」
(『異邦人』第1部第6章における海辺の描写)

これら少数の断章をつなぎあわせるだけでは、『異邦人』着想の流れを辿ることは極めて難しい。そもそも、先行テキストやメモが完成された作品との関わりを持つというのは、作品からさかのぼって遡及的に捉えた見方に過ぎず、そのテキストやメモが執筆されたときに、将来どのような作品の中でどのように用いられるかを作家が予見していたなどとは言えないはずである。草稿以外の関係テキストを用いるときは、少なくとも3つのカテゴリーに分けてテキスト批評を行わなければ、作品の成立論の根拠とすることはできないであろう。

ケース1：書かれた時には作品はまだ着想していなかったが、その後利用されることになるテキストの断片やアウトライン。

ケース2：作品の着想過程で書かれたテキストの断片やアウトライン。

ケース3：作品の骨格が固まり、その中で用いることを狙いとして書かれたテキストの断片。

ところが、『異邦人』の解釈論やムルソーの人物論において、『ノート』における上記の断章が、書かれた前後関係や年代的な位置づけを度外視して、議論の展開に都合の良いように場当たりに利用されることが多かった⁹⁾。作家の存在を捨象し決定稿のテキストが産出する意味の読解に焦点を絞るという批評が、その論拠としてテキストに先行するメモの類いを挙げるのはそもそも自己撞着だが、成立論の領域を扱った批評となると、テキスト批評を経ない断章の利用は、致命的な結論を招きかねない。例えば『ノート1-1』断章073は、死刑囚と司祭という、『異邦人』最終章の状況を想起させるエピソードではあるが、明らかに上記1)のカテゴリーに属するこの断章から、カミュが『異邦人』を着想したのは1937年6月にさかのぼるという結論を引きだすとしたら、短絡的に過ぎる。

死刑囚の元を、司祭が毎日訪れる。首を落とされるという恐怖から、死刑囚は膝を折り、唇にある名前を唱えそうになり、狂おしく床に身を投げ出し、「ああ神様！」という叫びのうちに身を隠しそうになる。

だがそのたびに、この男の中に抵抗の思いが沸き、このような安易な解決は望まず、あらゆる恐怖心を飲み込んでしまおうとする。男は一言も口にせず、目に涙をいっぱい溜めて死んでゆく¹⁰⁾。

死刑囚と司祭という（それ自体ありきたちの）設定自体が『異邦人』の主要テーマなのではない。死刑という定めを前にして自己と世界との根源的な乖離、すなわち不条理を明晰に認識した主人公が、その不条理を体現しつつ来世への救いを説く司祭に対して積極的な反抗の叫びをあげること¹¹⁾、最後の瞬間に世界そのものとの和解を果たすというのが最終章のクライマックスであり、『異邦人』の根幹を支えるテーマだからである。パスカルの言うごとく人はみな死を免れぬという意味で等しく「死刑囚」という条件の元にあるならば、ムルソーの孤独な反抗の叫びは万人になり代わってこの世界の不条理と対決する道に他ならず、だからこそムルソーは「我々にふさわしい唯一のキリスト¹²⁾」と呼ばれたのである。目に涙をためながら、神の名を口にするに対してだけ受動的な抵抗を示す死刑囚と、不条理への反抗者ムルソーとの間には本質的な隔たりがあり、この断章は直接『異邦人』につながるというよりも、若年期からカミュを捉えていた死の妄執にまつわるテキストの一つとして当初は書かれ、その後その設定が『異邦人』に利用されたと捉えたほうが適切であろう¹³⁾。

さらに、こうした先行テキストが、直接決定稿に取り入れられたかどうかという問題がある。キヨのブレイヤッド版解題を基盤にする形で『異邦人』の成立論を展開したピエール＝ジョルジュ・カステックス Pierre-Georges Castex は、『ノート 1-1』断章038の、トラックの後を追いかけて荷台に飛び乗るという、アルジェリアの若者のダイナミックなコマがそのまま『異邦人』第1部第3章における同様のシーンに使用されたと、テキストを実際に引用しながら指摘し、またこの断章が『ノート』の中でもかなり初めの部分の記述に属することから、『異邦人』の着想とは言わないまでもそのヒントとなるさまざまな発想がごく初期の頃から生まれていたのではないかと暗に述べ、『異邦人』の構想には数年間かかったのであろうという自らの主張への傍証としている¹⁴⁾。しかしながら、この断章は『ノート』から直接『異邦人』に取り入れられたものではなく、『異邦人』に先立って執筆したものの出版を断念し、いわば隠された「処女小説」となっていた『幸福な死』 *la Mort heureuse* にまず利用されていたのである。『異邦人』の主人公ムルソーの日常生活を描写した部分で、カミュは先行する『幸福な死』から2ヶ所テキストの引用を行っているが、このトラックのシーンはその一つであった。したがって、断章038は直接『異邦人』のテキストと比較して検討することはできず、まず『幸福な死』にどのように利用されたかを調べなければならなかったわけだが、カステックスが『アルベール・カミュと「異邦人」』を著したときにはまだ『幸福な死』は刊行されておらず、そのような作業を行うことができなかったのである。

『異邦人』に関わりを持つ先行テキストとしては、それゆえ、『ノート』の12の断章に加えて、『幸福な死』における2つのパッセージが挙げられるわけであるが、それらで全てであると言ってよい。

- A 『幸福な死』 pp.34-35 「トラックの後を走るエピソード」
（『異邦人』第1部第3章 p.1143 に若干の変更を行って引用されている）
- B 『幸福な死』 pp.44-37 「主人公の日曜日のエピソード」
（『異邦人』第1部第2章 pp.1139-42 に若干の変更を行って引用されている）¹⁵⁾

そして、この『幸福な死』の存在が、『異邦人』の成立を巡る議論をさらに錯綜させる要因となった。『異邦人』と『シーシュポスの神話』という、占領下のフランスで出版された文学書の中でも抜きん出た傑作によりデビューし、たちまち文壇の寵児となったカミュには、情報に乏しい時代背景もあって、そのような傑作を、何もない無から、予定調和的に生み出すことのできる天才というイメージが生まれた。またカミュ自身、アルジェリア出身という文化的ハンディキャップやある種のコンプレックスを覆い隠し、中央の文壇で生き延びてゆくために、こういった神話的イメージを利用し、自らの才能を実際以上に見せようとしたふしがある¹⁶⁾。ところが実際のカミュは、小説の執筆に手を染める前にエッセイ集という修業を行い、『異邦人』を執筆する前には、事実上の処女小説『幸福な死』の構想・執筆という惨憺たる努力と、最終的には自ら失敗作と判断して出版を断念するという苦しい前史を体験していたのである。だが『幸福な死』は、その存在がすでにカミュの晩年から明らかにされており、また、作品の概要がプレイヤード版『異邦人』の解題に載せられていたとはいえ、出版されたのは1971年になってからであり、それまでは『幸福な死』との関わりにおいて『異邦人』の成立論を論じることはできなかったのである¹⁷⁾。

『幸福な死』と『異邦人』のテキスト上の関わりは、上記の引用部分以外に認められない。キヨによれば『異邦人』第1草稿では主人公の名前は Meursault ではなく、Mersault と、『幸福な死』の主人公と同じ名になっているそうであるが¹⁸⁾、ムルソーとメルソーの人物像の造形は、後に述べるように、小説そのものの相違と同じくらいに大きな隔たりがあり、名前が初稿で共通していたことから作品の関連性を深く論じることはできない。このような点を除いては、両作品は、同じ作者が、それもそれほど歳月を置かずには執筆したとは思われないほど、テーマ、内容、文体のすべてにわたって隔たっている。この点において、キヨによる『幸福な死』の位置づけは的を射ているだろう。

『幸福な死』は、『異邦人』の前身ではあり得ない。確かに『異邦人』はこの作品に多くを負っているが、『幸福な死』は、全く別の著作であり、いわば、ばらばらになる形で将来のカミュ作品に役立ったのである¹⁹⁾。

したがって、『幸福な死』と『異邦人』の着想時期がオーバーラップしているとか、同時並行的に執筆が進められたとかいう仮説はほとんど成り立ちえない。『幸福な死』執筆の試みによってカミュが到達した地点から『異邦人』の歩みは開始された、あるいは、『幸福な死』の挫折が一種の起爆剤となって、カミュはデビュー作となる「第二作」の構想を開始した、と考えるべきであろう。それゆえ、『異邦人』の成立過程について検討するためには、『幸福な死』の構想と執筆の時期について検証することが、まず必要となるのである。

1-3.『幸福な死』と『異邦人』

『幸福な死』が出版される10年以上も前にその原稿にあたることのできたキヨは、このような事情から、プレイヤッド版『異邦人』の解題を、『幸福な死』の解説・分析から初め、『幸福な死』と『異邦人』の対比に多くのページを割いている。このキヨの分析が、前記カステックスを初め、多くのカミュ研究者における『幸福な死』観と、『異邦人』の成立に関するイメージを1962年から71年にかけての10年間にわたり決定づけ、ある意味で現在もなお影響を及ぼしているのである²⁰⁾。この解題から、『幸福な死』から『異邦人』への変遷について論じた部分を簡単に要約してみよう。

1935年から38年にかけてカミュは『幸福な死』に取り組んだ²¹⁾。1936年1月にカミュが『ノート』に記している「人はイメージによってしかものを考えない。哲学者になりたいのなら、小説を書きたまえ」という言葉が、作家の当初の意図を表している、というのも、このすぐ後のページに、カミュは『幸福な死』第2部のプランを記しているからである。

幸福と死というテーマを中心にしたこの作品をカミュが着想したのは、1936年当時、カミュの結核の病状が悪化したためであろう。

『幸福な死』を書き終えると同時に、カミュは次の作品の着想に取り組んだ。1937年の4月には、次のような断章を『ノート』に記している「自らが正しいと言い張らない男、他人がその男について抱くイメージのほうが彼には好ましい。自分の真実を意識しながら、たった一人で男は死ぬ。こういった慰めの虚しさ」²²⁾

1937年の6月には、『異邦人』のライトモチーフの一つとなる断章が現れている(ここで、キヨは先に分析した『ノート』1-1・断章073を引いている)。

1937年8月には、極めて重要な断章が現れる。

「通常人生を見いだすところ(結婚、就職など)に人生を求めていたある男が、突然、モードのカタログをめくりながら、どれほど自分が人生(モードのカタログの中で見いだされるような人生だ)に無縁な存在であったかに気がつく

第1部：それまでの人生

第2部：賭け/演技

第3部：妥協の放棄と自然の中の真実(『ノート』1-1・断章110)²³⁾

筆者(=キヨ)との会話で、カミュは、この断章が『異邦人』の出発点であると言明した²⁴⁾。

1938年6月、カミュは「小説を書き直すこと」と記しているが、これは『幸福な死』を指しているのだろう。

『異邦人』に関するまとまった構想はまだ認められない。

だがこれ以降、関係する記述が増えるようになる。5月にはマランゴの老人ホームで死んだ老女の話が記されている。明らかにこれは、カミュが実際に体験した話だろう。死んだ老女の親友の話

や、葬列に付き従う体の不自由な老人の話や、性病のために鼻が欠けたモール人の看護婦の話など、『異邦人』第1部第一章におけるエピソードの大部分が認められる。
(これは前記の『ノート1-2』断章069のことを指している)

キヨの主張はしたがって、『幸福な死』は1936年～37年の間に着想・執筆され(冒頭では「35年から38年にかけて取り組んだ」と述べているのだから、明らかに矛盾している)、カミュは37年の前半のうちに『幸福な死』を書き上げると同時に出版は断念し²⁵⁾、やがて『異邦人』となる小説の基本的テーマを37年の中葉に着想したが、1年間ほとんど何の進展も見せぬまま、ようやく38年の5月ごろから、『異邦人』の中に利用されるエスキスが現れるというものである。

この分析には、一読しただけで、素朴な疑問が湧く。小説を構想する際に、まず第2部のプランが着想されるということがあるだろうか？第1部の構想は、それではどうなったのだろうか？『異邦人』の出発点が37年の夏だというのなら、それからほぼ1年間、『異邦人』に利用されるような断章がまったく『ノート』に現れていないのはどうしてだろうか？なんのメモも取らず、ただ頭の中だけで、カミュは『異邦人』の想を練ったというのだろうか？38年の6月になってから、なぜまた改めて『幸福な死』に舞い戻って、「小説を書き直す」ということになるのか？

前記カステックスは、キヨの解釈を受ける形で、1937年の8月こそが『異邦人』の着想において決定的な時期であると論じた。この年の夏、カミュは友人たちとパリ、南仏、イタリアを旅行しているが、8月中旬から9月初めにかけては、南仏オート＝アルプのアンブラン村に、結核の療養もかねて滞在した。「長く続いた休息と孤独の結果、カミュの世界観に変化が生じ、生まれながらの人嫌いの傾向が増し、瞑想を続ける中で、いくつもの重要な作品が着想されることになる²⁶⁾」。カステックスはキヨと同じく『ノート1-1』断章110を引用しながら、自分がこれまでいかに社会のさまざまななしきりへ順応しよう努めてきたか、つまり社会的人間の演技を行おうとしてきたか、カミュがその虚しさに気がつき、それが、「自分に忠実であるあまり、裁判という場にあってもさえ社会的な演技を拒む」ムルソーの人物造形につながっていったと主張する²⁷⁾。

ところが一方で、カステックスは、「とりわけこのアンブランで、かなり以前から着想されていたがそれまでは形をなしていなかった『幸福な死』が、明確な形を取った」と述べている²⁸⁾。カステックスの理解では、『異邦人』の着想と『幸福な死』の構想・執筆はほぼ同時並行的に、1937年の8月から開始されたということになるのだ。これはほとんど不可能な仮説である。前記パンゴーのひそみにならえばこれほどまでに文体の異なる小説が、さらには内容もかけ離れた小説が、同時に着想されることはありえない。しかも当時のカミュは作家としてデビュー前の一文学青年に過ぎない。小説と平行してエッセイや戯曲に取り組むことはできたとしても、2つの小説の着想を平行して行うという器用なことができたはずはない。キヨが述べるように、『異邦人』は、『幸福な死』の執筆をカミュが終えてから、あるいはその発表を断念してから、新たに小説創作の試みに取り組む中で着想されたと見なすのが自然である。

ではカステックスはどうしてこのような誤解をしたのか？それは、『ノート』において『幸福な死』に関する断章が数多く現れるのは、次章で詳しく分析するように、このアンブラン滞在のあと、1937年9月以降だからである。したがってキヨが主張するように『幸福な死』は1937年前半に書き上げられた」ならば、一度書き終わった小説に関してあらためてメモを取るというおかしな事態が生じたことになる。しかも、これらの断章のうち多数は、実際に『幸福な死』に使われているテキストと同じものを含んでいる。創作ノートのテキストを小説に引用するということはあっても、小説のテキストを創作ノートのほうに書き写すなどという逆転現象がありうるだろうか？とりわけ『ノート1-2』の冒頭の長い断章は、次のような形で始まっているが

22 septembre.

La Mort heureuse. «Voyez-vous, Claire, c'est assez difficile à expliquer. Il n'y a qu'une question: savoir ce qu'on vaut. Mais pour ça, il faut laisser Socrate de côté. Pour se connaître, il faut agir, ce qui ne veut pas dire qu'on puisse se définir. Le culte du moi! Laissez-moi rire. Quel moi et quelle personnalité? [...]²⁹⁾

『ノート』において『幸福な死』*La Mort heureuse*という言葉が現れるのはこの断章が初めてなのである。小説の題名の着想は、作品そのものの着想と密接に関わっているであろう。それまでさまざまな構想を抱いてきたカミュが、「幸福な死」という名称の元にそれらの構想をまとめ挙げられるという確信を抱き、新たなノートを下ろしてメモを書きつけ始めた、つまり『幸福な死』の明確な着想は1937年9月になるというのが、自然な解釈ではなからうか。カステックスはこの点に気づいたが、その解決のために、『異邦人』と『幸福な死』の構想時期が重なるという、もうひとつの無理な解釈を持ち込んでしまったのである。

キヨやカステックスが引く『ノート1-1』断章110も、『異邦人』の出発点であるというよりも、『幸福な死』の着想の原形となったと考えるほうが自然である。『異邦人』のメルソーは、恋人マリ・カルドナから結婚を求められても、婚姻という社会的慣習自体には意義を認めず(I-5) 勤める事務所の経営者からパリへの栄転を勧められてもうなずこうとはしない(I-4)³⁰⁾。「通常人生を見いだす結婚、就職などに人生を求めていたが、突然、モードのカatalogをめぐりながら、どれほど自分がそのような人生に無縁な存在であったかに気がつく」などということではなく、初めから社会的慣習に無縁でありながら、そのような自己のあり方に充足している存在として小説に現れているのである。それに対して『幸福な死』のメルソーは、とりわけ経済的な不如意から自らの忠実な生き方ができないことに違和感を抱きつつも、社会的な「演技」を行い、そこからの解放を求めて殺人を犯して大金を奪うという「賭け」に転じ、友人達との共同生活という「妥協」は放棄して一人アルジェリア郊外のシュヌアに引きこもり、そこで「自然の中の真実」を見いだしてゆくのである。

『カイエ・アルベール・カミュ 1』 *Cahiers Albert Camus 1* において『幸福な死』の校訂を行い、詳細な注を施したジャン・サロッキ Jean Sarocchi は、慧眼にも断章110は『幸福な死』のためのものであると断じている。「『それまでの人生』といのは、貧しさと、日々続く8時間の労働、社会的関係の味気なさを暗に示している [...] 孤独と自然の中への逃避というのは、最初の草案から現れ、執筆の終了に至るまで、小説の目標であり続ける³¹⁾」

このようにして、『異邦人』の出発点を1937年夏に求めるあまり、キヨは『ノート』の記述には目を瞑り(『ノート』校訂者でもあるからには熟読できたはずなのに)、『幸福な死』の完結を37年半ば以前に強引に位置づけた。一方カステックスは、『異邦人』と『幸福な死』の構想時期が重なるという無理な結論を暗に述べた。いずれも矛盾に満ちており、『異邦人』の着想が37年にさかのぼるという説は、棄却する必要がある。事実は、37年の夏に着想されたのは『幸福な死』のほうだったのである。

それでは、「カミュは『幸福な死』に1936年以来取り組んできた」とキヨが言明し、カステックスが「形はなしていなかったものの『幸福な死』は37年夏よりかなり前から着想されていた」と述べるその根拠はどこにあるのだろうか。また、37年9月から取り掛かった『幸福な死』はどのように形を取り、いつまで執筆され、いつ作品としての発表が断念されたのだろうか。

次章では、『幸福な死』の成立を巡って、『ノート』を初めとする先行テキストを分析しながら論じることとする。『幸福な死』の発表断念の時期を明確にすることで、それに引き続く『異邦人』の着想時期が絞られてくるからであり、また同時に、第一作を作者が失敗作であると判断したからには、その反省に立ってこそ第二作は構想されたはずであり、したがって『幸福な死』の詳細な分析は、『異邦人』の秘密を映し出す「鏡」として機能するからである。

2. 『幸福な死』の着想過程

2-1. 『ノート』をめぐる謎

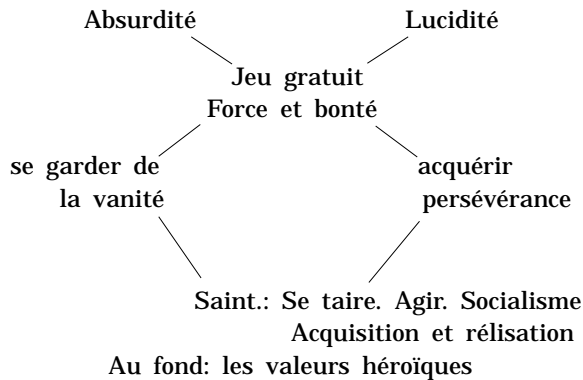
『幸福な死』が1936年から着想されているという説が論拠としているのは、あきらかに『幸福な死』のためと思われる具体的な構想をメモした断章3つが『ノート1-1』において現れている、その位置にある。これら断章012~014は、キヨが引いたように「哲学者になりたいならば小説を書きたまえ」という『ノート1-1』断章011(P.23)の直後に置かれているが、それらは、「1936年1月」と言う日付ヘッダのある『ノート1-1』断章010(P.20~)と「1936年2月13日」というヘッダのある『ノート1-1』断章17(P.27)の間に挟まれているのである¹⁾。また、断章012~014は、内容的に緊密に関連しており、ごく短期間に続けて記されたと考えられる。したがって、カミュが『幸福な死』を着想したのは1936年1月から2月上旬にかけて、ということになるわけである。実は、それ以外のテキスト上の裏付けや伝記的事実の傍証は一切上がっていないと言ってよい。

以上4つの断章に関して検討してみよう。

011

On ne pense que par image. Si tu veux être philosophe, écris des romans.

012



II^e Partie

A. au présent

B. au passé

Ch. A 1 La Maison devant le Monde. Présentation.

Ch. B 1 Il se souvenait. Liaison avec Lucienne.

Ch. A 2 Maison devant le Monde. Sa jeunesse.

Ch. B 2 Lucienne raconte ses infidélités.

Ch. A 3 Maison devant le Monde. Invitation.

Ch. B 4 Jalousie sexuelle. Salzbourg. Prague.

Ch. A 4 Maison devant le Monde. Le soleil.

Ch. B 5 La fuite (lettre). Alger. Prend froid, est malade.

Ch. A 5 Nuit devant les étoiles. Catherine.

013

Patrice raconte son histoire de condamné à mort: «Je le vois, cet homme. Il est en moi. Et chaque parole qu'il dit m'étreint le cœur. Il est vivant et respire avec moi. Il a peur avec moi.

«... Et cet autre qui veut le fléchir. Je le vois vivre aussi. Il est en moi. Je lui envoie le prêtre pour l'affaiblir tous les jours.»

«Je sais que maintenant je vais écrire. Il vient un temps où l'arbre, après avoir beaucoup souffert, doit porter ses fruits. Chaque hiver se clôt dans un printemps. Il me faut témoigner. Le cycle après reprendra.

«... Je ne dirai pas autre chose que mon amour de vivre. Mais je le dirai a ma façon...

«D'autres écrivent par tentations différées. Et chaque déception de leur vie leur fait une œuvre d'art, mensonge tissé des mensonges de leur vie. Mais moi c'est de mes bonheurs que sortiront mes écrits. Même dans ce qu'ils auront de cruel. Il me faut écrire comme il me faut nager, parce que mon corps l'exige.»

III^e Partie (tout au présent)

Chap. I. Catherine, dit Patrice, je sais que maintenant je vais écrire Histoire du condamné a mort. Je suis rendu à ma véritable fonction qui est d'écrire.

Chap. II. Descente de la Maison devant le Monde au port, etc. Goût de la mort et du soleil. Amour de vivre.

014

6 histoires:

Histoire du jeu brillant. Luxe.

Histoire du quartier pauvre. Mort de la mère.

Histoire de la Maison devant le Monde.

Histoire de la jalousie sexuelle.

Histoire du condamné à mort.

Histoire de la descente vers le soleil.

断章011はカミュ流のアフォリズムであって、キヨが主張するように、これだけから小説作成へ向かう自覚がカミュの中に生じていたかどうかを判定するのは無理があるが、「roman」という単語が『ノート1-1』の中で現れるのがわずかに6ヶ所であることを考えると、かなり重みのある書きつけかもしれない。断章012から014にかけて現れる「世界を前にした家」la Maison devant le Mondeは、アルジェリア時代のカミュが一時期友人達と共同生活を送った見晴らしの素晴らしい家Maison Fichuのことで、『幸福な死』II-3の舞台となっている²⁾。またLucienneやCatherineは『幸福な死』に登場する女性の名前だが、B2にあるように「不義を告白する」のは、作中ではMartheの役回りとなっている。断章13で述べられている「死刑囚の話」は、結局『幸福な死』には盛り込まれず、大きく形を変えて『異邦人』のプロットに生かされることになったが、Patriceは『幸福な死』の主人公メルソーのファースト・ネームである。「華麗な賭け」「貧しい地域の物語と母親の死」「性的な嫉妬」「太陽に向かって下ってゆく物語」は、すべて直接あるいは間接に『幸福な死』のエピソードとして生かされている。つまり、断章14の「6つの物語」のうち5つまでは『幸福な

死』の素材として利用されることになる。また、第2部において、現在形と過去形を交代させながら物語を進めるというメモがあるが、さすがにこれは不自然な時制の用い方だとカミュは気がついたようで、『幸福な死』II-3においてすべて現在形で物語を綴るという試みに痕跡をとどめることになる。後年『異邦人』において複合過去を基調にした文体の実験を試みるカミュが、すでに『幸福な死』の構想の時点から時制の使用に関する試みを考えていたことは、示唆に富んでいるだろう。

以上から、『ノート』におけるこれら3つの断章が、最終的な構成はかなり変更されたとはいえ³⁾、『幸福な死』の執筆につながっていると言う点は確かであろう。したがって、『幸福な死』の着想は、1936年1月から2月にかけて、という解釈が成り立ち、キヨやカステックス、およびかれらの解釈の流れを汲む研究者は、これを根拠にしているわけである。

だが、いくつかの疑問も生じる。小説を構想するときに、第2部から想を練るものだろうか。第1部の構想はいつ行われたのだろうか。ここまでプランが具体的にまとまっていたなら、引き続き『幸福な死』に関する断章をカミュが書き留め、構想を展開させてゆくのが自然だと思われるが、そのような断章は現れているのだろうか。

ところが、『幸福な死』に関する断章は『異邦人』とは異なりかなり数が多く、『ノート』全体を通じて、ごく短いものまで含めて50近くを数えるのに、断章014の後、1936年内には5つしか数えられず、第2部までのプランがかなり具体的に固まっていたにしては異様に数が少ないのである⁴⁾。1937年1月のヘッダのある断章054から056にかけて、「世界を前にした家」に関する記述が現れるが、これには「エッセイ」とある。小説に使われるはずだったエピソードがエッセイに後退するというのは不自然ではなかろうか。しかもその内容は、前記の断章12~14と比べてさしたる進歩はない。『ノート』の流れをそのまま追うかぎり、カミュは、『幸福な死』第2部第3部の構想を抱いたものの、その後1年間、さしたる進展もなく手をこまねいていたということになる。そして、問題となる第1部の構想は、なんと1年半も経った1937年8月のヘッダを伴って現れているのである。

118

Août 37.

Plan. 3 parties.

I^{er} partie: A au présent

B au passé.

Ch. A 1 Journée de M. Mersault vue par l'extérieur.

Ch. B 1 Quartier pauvre de Paris. Boucherie chevaline. Patrice et sa famille.

Le muet. La grand-mère.

Ch. A 2 Conversation et paradoxes. Grenier. Cinéma.

Ch. B 2 Maladie de Patrice. Le docteur. «Cette extrême pointe...»

Ch. A 3 Un mois de théâtre circulant.

Ch. B 3 Les métiers (courtage, accessoires automobiles, préfecture).

Ch. A 4 L'histoire du grand amour:

«Vous n'avez plus jamais éprouvé ça? Si, madame, devant vous.» Thème du revolver.

Ch. B 4 Mort de la mère.

Ch. A 5 Rencontre de Raymonde.

非常に気になるのは、ここに現れている「第1部」のプランのフォーマットが、断章012における「第2部」のフォーマットに酷似していることである⁵⁾。1年半も前の第2部のフォーマットに合わせて第1部の構想をまとめるという器用なことが可能だろうか。それだけの時間が過ぎれば、構想の立て方にも変化が生じるのが自然ではなからうか。むしろ、この第1部の構想のほうが先に書かれたと仮定して、これに引き続いて断章012の第2部の構想を読んだほうが流れが自然ではなからうか。カミュは1936年1～2月に第1部と第2部の構成を考えたときに、第1部は別の用紙にメモに取っておき、それを1年半経ってからわざわざ「ノート」に書き写したのだろうか。それでは37年8月というヘッダの意味はどうなるのだろうか。

断章を記した時期を表すヘッダに関しては、別の角度からの疑問もある。最初の断章から『異邦人』の脱稿が記されている『ノート1-3』断章14(P.214)に至るまで、総計で439篇の断章が『ノート1』には記されており、そのうち108篇にヘッダが入っているが、1936年の部分のヘッダ入り断章15篇の一覧を次に掲げよう

【表2】

ページ	断章番号	日付ヘッダ	冒頭の文
020	1-1-010	Jan 36	Ca jardin de l'autre côté de la fenêtre,
	1-1-017	13/02/36	Je demande aux êtres plus qu'ils ne peuvent
	1-1-019	Mars	Journée traversée de nuages et de soleil.
030	1-1-024	16 mai.	Longue promenade. Collines avec la mer
	1-1-026	Mars	Ciel gris. Mais la lumière s'infiltré.
	1-1-027	Mars	Ma joie n'a pas de fin.
032	1-1-029	Mars	Clinique au-dessus d'Alger.
034	1-1-031	31 mars	Il me semble que j'émerge peu à peu.
	1-1-033	Avril	Premières journées de chaleur.
	1-1-039	Mai	Ne pas se séparer du monde.
	1-1-040	Mai	Tous les contacts=culte du Moi?
039	1-1-041	Mai	Ces fins du jour à Alger où les femmes sont
	1-1-042	Mai	Aux confins Et par-dessus: le jeu.
041	1-1-046	Mai	Que la vie est la plus forte vérité,
042	1-1-050	Nov	Voir la Grèce. Esprit et sentiment,

まず目に付くのは、6月～10月の間のヘッダが皆無であり、書かれている断章もほとんどないことである。この理由に関してはこの後分析するが、次に疑問に思えるのは、断章030で「5月16日」と記したそのすぐ後に「3月」と記した断章が現れていることである。この点はすでに何人もの研究者から指摘されており、本論第1章の注3で紹介した、オリヴィエ・トッドは、「カミュがわざと行ったのかどうかはわからないが、日付に関する多くの誤りが『ノート』に認められる」と述べているが⁶⁾、これは誤った指摘であり、実際には日付に関するヘッダが時間の流れに沿っていないのはこの1ヶ所にすぎない。「ノート」はカミュにとって極めて貴重なテキストであり、さまざまな作品に利用したことから、いったん書いたものにも何度も目を通していたと思われる。月の間違いくらい気づいて直しそうなものではないか。どうして遺稿となるまでこの誤りが残されてしまったのか。それは、実際に「5月16日」に書かれたテキストだからだと考えるのが一番自然である。それでは、なぜノートのこの部分に「5月16日」に書かれたテキストが現れたのだろう。そもそも、「5月16日」というのは、何年の「5月16日」なのだろうか？

さらに、伝記的事実から見た疑問がある。やはり第1章の注5で紹介した、カミュの評伝の作者ハーバート・ロットマンによれば、カミュと友人達が「世界を前にした家」のモデルとなった、アルジェ中心部の高台シーディ＝ブライム通りにある「メゾン・フィッシュ」を見つけその2階を借りることにしたのは、日付は明確ではないが、1936年の春のことであるという⁷⁾。また、カミュが「メゾン・フィッシュ」を根城にするようになったのは、36年の秋になってからである。断章012にあるように、それよりも以前の36年1～2月に、「世界を前にした家」のテーマが小説の構想に現れるということがありうるだろうか。

さらに決定的なのは、断章012の「Ch. B4 性的な嫉妬、ザルツブルク、プラハ」という記載である。本論第5章で詳しく見ることになるが、最初の妻でありカミュにとっての「宿命の女」シモーヌとの関係が破局を迎えるのは、1936年7月の中央ヨーロッパ旅行の途中、ザルツブルクにおいてであった。カミュは妻の不倫の動かぬ証拠を、しかも麻薬中毒だった彼女の治療にあたっていた医師がその相手だったことを、知ったのである。その直後、傷ついたカミュはプラハで孤独の数日間を送り、精神的な危機を迎える。その時の心象風景を、カミュは本当の原因を押し隠す形で『裏と表』に収められたエッセイ「打ち拉がれて」として執筆したが、それでは昇華しきれなかったトラウマを、小説作品の中で解放するべく、その後『幸福な死』の構想の中に盛り込んでゆくのであるが、「Ch. B4」の記述は、この出来事を踏まえたものであるとしか考えられない。1936年の7月に起こったできごとに基づく構想が、36年1～2月の断章に現れることなどあるはずがない⁸⁾。

要するに、『幸福な死』の第2部の構想に関わる断章が36年の初めに書かれたと思ひ込むがぎり、これらの矛盾は解決しないのである。そうではなく、1937年8月に書かれた、それゆえ「世界を前にした家」のエピソードも「性的な嫉妬」のテーマも盛り込まれた『幸福な死』の最初の構想のうち、第2部と第3部にあたる断章012～014があやまって1936年の部分に紛れ込んでしまい、第1部の部分だけが本来の場所に残ったと仮定すれば、ほぼすべての問題が解決するのではないか。『幸福な死』

の第2部の着想から1年半経ってから第1部が構想されたのではなく、したがって1年半カミュがなんらの進歩も示さなかったのではなく、全体が1937年の8月に構成された、すなわち『幸福な死』の厳密な意味での着想は37年8月であって、36年当初などではなかったのではないか。断章118の方には「37年8月」という明確なヘッダがあるが、キヨ達が判断の根拠としている断章12～14には日付のヘッダはなく、前後の断章がなければ、いつ書かれたかを判断する根拠はないのである⁹）。

おそらく「ノート」のこの部分がカミュ自身の手で切り取られ、再編集されるということがあり、その結果このような混乱が生じたのではないだろうか。さらに、断章012～014に限らず、1936年の「ノート」全体にその影響が及び、先に挙げた日付のうえでのミスも生じたのではなからうか。「5月16日」のヘッダがある断章024が、実は1937年5月16日に書かれたものがここに紛れ込んだ、あるいは1936年5月16日の断章が移動してしまったと考えると、疑問は氷解するのである。

そして、断章012～014を1937年8月の時点に移動させると、『ノート』のうち1936年に書かれたとこれまで思われている範囲の断章で、『幸福な死』に関わりを持つものは以下の5篇だけになってしまう。

- 1-1・断章023(p.29)「港の光景」
- 1-1・断章030(pp.33-34)「拳銃自殺の願望に取り憑かれた男の話」
- 1-1・断章036(p.36)「負傷し血を流す港湾労働者」
- 1-1・断章037(p.37)「負傷し血を流す港湾労働者」
- 1-1・断章038(p.37)「トラックの後ろを走る若者のエピソード」

しかも断章023、036、037、038はその内容が部分的にその後『幸福な死』に用いられることになったという、前章で述べた「ケース1」に該当するものであり、これらに、36年に『幸福な死』が着想されたという根拠を求めるのは無理がある。さらに、これまで述べた理由から、これら5篇の断章もノートされた時期には留保をつけねばならず、断章023、036、037、038は文体や内容から1936年のものと考えるのが自然だが、断章030「拳銃自殺の願望に取り憑かれた男の話」は、そのまま『幸福な死』の登場人物ザグルーのエピソードとして、ほとんどそのままの形で利用されているテキストであり、断章012～014同様、1937年に書かれたものがここに紛れ込んでいる可能性もある。以上のように、日付ヘッダのない断章012～014を1936年1～2月というヘッダのある前後の断章から外してしまうと、『幸福な死』が1936年から構想されていたという根拠はほぼ壊滅するのである。

筆者は、上述した1936年7月の愛情の破局からカミュが被った傷の深さが、事柄の鍵を握ると考える。この旅の間に書きつけた断章、あるいは旅の後にその苦しみについて記した断章を、堪え難いものとカミュが判断して切り取り、代わりにその他のページを切り取って挿入したのではなからうか。旅日記を記すというのは一般的な習慣だが、カミュも旅行や住居の移動に際して「ノート」に断章を書き留めることが多く、とりわけ翌1937年のイタリア旅行では豊富なテキストを残していることを考えると、中央ヨーロッパの旅に関する断章が『ノート』のこの部分に見つからないのは不自然である。そう考えると、36年6月～10月の間の日付ヘッダを持った断章が一つも存在しない

理由の説明もつく¹⁰⁾。

前記ロットマンは、『評伝カミュ』第7章の注で次のように指摘している。「『ノート』第1巻の原稿は切り取られたり貼り合わされたり、間にページが挟まれたりしている。おそらく、個人的な省察が記されていて、後になってからカミュが自分の「ノート」に残しておきたくない判断したのだろう。したがって、1937年7月までの『ノート1』第1ノートは、時期の特定にはあまり役立たない¹¹⁾」ロットマンのこの指摘を補強する調査結果は、『評伝カミュ』刊行後20年近く経つ現在も特に著されていない状況だが¹²⁾、以上のような状況証拠に基づく分析から、その正しさは確実であろう。

2-2.『幸福な死』の着想

小説という形で自己表現を試みたいという願いを、ごく若いころからカミュは抱いていたようであり、『幸福な死』が小説として構想された最初のケースだとにはわかには断じられない。ロットマンは「『幸福な死』よりも前に小説に取り組み、それを廃棄した可能性もある」と述べ、トッドは、「『幸福な死』は、原稿が見つかったものの中では、カミュの最初の小説である」と指摘している。また、カミュにとっての「ノート」にしてからが、小説のための創作ノートにしたいという意図から記述されるようになったというふしがある。『ノート』冒頭の、1935年の日付ヘッダがある断章は、小説の構想を念頭に置いたものと解釈されるからである。

35年5月

僕の述べたいこと。

ロマンチズムからではなく、過ぎ去った貧しさへのノスタルジーを抱くことがある。貧しさのうちに何年かを過ごただけで、一つの感性が形作られるのだ。この特別なケースでは、息子が母親に対して抱く奇妙な感情が、**彼の感性の全体**を形作る。こうした感性がさまざまに異なった領域で現れることは、子供時代の隠された、物質的な思い出(魂にからみつく鳥もち)によって説明が付く。

[...] 作品は告白であり、僕は証言をしなくてはならない。語らなければならないこと、しっかり見なければならないことは一つしかない。あの貧しき生活の中でこそ、憤ましいあるいは見えっ張りだったあの人々の間でこそ、人生の本当の意味と思われるものに、僕はもっとも確かな手触りを感じたのだ。芸術作品は、そのためには決して十分ではないだろう。僕にとって芸術がすべてなのではない。少なくとも手段ではあってほしい¹³⁾。

当時21歳に過ぎない文学青年のマニフェストを過大に解釈するのは慎まなくてはならないが、表現者としてのカミュの出発点が見て取れる断章である。若きカミュにとっては、文学作品はなによりも個人的な感性と内的体験の告白であり、しかしながらそれを通じて、母親や近親者の真実について、証言を行うことができる。芸術それ自体が目的ではなく、表現と証言のための手段に過

ぎない。後年、自己表現の苦しい営みを重ねながら、その一方で時代の証人として雄々しく生き抜いた作家の姿を想起すると、この断章には運命的なものさえ感じられよう。

この断章の記載に、『カイエ・アルベール・カミュ 2』に収録されたさまざまな初期の原稿を重ね合わせると、カミュは、自らの貧しい生い立ちと母親との奇妙にねじれた愛情のありかたをテーマにした小説に取り組もうと考えたようである。カミュにとっての「失われた時」を再構成しようとして¹⁴⁾。プレイヤッド版全集の「エッセイ篇」も校訂したロジェ・キヨは、『裏と表』の解題の中で、「1935年頃、カミュが母親のテーマでエッセイを構成しようとしたのは確実らしい」として、そのプランを引いているが、第3章で分析するように、これはエッセイのためのものと考えるよりも、小説のプランと見なすほうが自然である。しかしその試みは成功を収めず、36年の前半までに、カミュは母親との関わりをテーマにした小説の構想を断念するか、一部書かれていたとしたら原稿を破棄したものと考えられる¹⁵⁾。

1934年12月25日の日付がある、作家の生前に未発表だったテキストに「貧しい地区の声」«les Voix du quartier pauvre» というものがあるが、おそらくこの幻の第1作を念頭に置いた草稿だったのだろう。「貧しい地区の声」は、その後、「肯定と否定のあいだ」«Entre oui et non» というエッセイに姿を変え、おそらくは1936年のうちに完成し、1937年5月にカミュの初めての作品として出版されたエッセイ集『裏と表』*l'Envers et l'endroit* に収録される¹⁶⁾。出発時点のカミュが苦しんでいたのは、テーマやテキストではなく、小説を構成する力量の不足であった。小説として構成しきれなかったテキストを、しかしながら自己表現のあかしとするために、エッセイ集に収める形で発表したものであり、同じように、1939年に出版されるエッセイ集『婚礼』*Noces* においても、『幸福な死』のテキストの一部が「チパザでの婚礼」「アルジェの夏」の2篇のエッセイで利用されている。初期のカミュにとって、エッセイ集は小説の代償行為だったのである。

『裏と表』は5篇のエッセイからなっているが、「肯定と否定のあいだ」と同様に重要なテキストが、中央ヨーロッパでの悲惨な体験に基づいた「打ち拉がれて」«la Mort dans l'âme» であり、当然ながら、その執筆は1936年8月以降となる。また、『裏と表』の最後を飾る短いエッセイ「裏と表」には、1936年1月の日付ヘッダを持つ『ノート1-1』断章10でほぼそのままの形で用いられている。このように母親のテーマに基づく最初の小説の試みを放棄した後、カミュはしばらくはエッセイ集の作成に取り組んだわけであり、『幸福な死』となる小説の構想は、『裏と表』の完成以降に位置づけなければ自然ではない¹⁷⁾。

1937年2月から6月にかけての日付ヘッダを持つ断章はなく、また、この期間に書かれたと想定される断章もほとんどない。この期間のカミュは、労働座での演劇活動、「アルジェ文化会館」での活動など、いわば社会的活動に全力を投入しており、内面的な表現行為に取り組む余裕はなかったものと思われる。それらの無理が重なって、健康状態が悪化したカミュは、37年7月から療養を心がけるようになり、再び創作に目を向ける。その間の事情を物語るように、1937年7月という、疑う余地のない日付ヘッダを久しぶりに伴って書かれた『ノート1-1』断章098には、「小説」の文字

が見えるのである。引き続いて断章099も小説のテーマに関する断章となっており、カミュはこの頃から、小説への取り組みを真剣に考え始めたのであろう。

098

Juillet 37.

Pour le Roman du joueur

Cf. Les Pléiades 2: Cadence débordante. Jouer le jeu.

Ame de luxe. L'aventurier.

099

Juillet 37 Joueur.

Révolution, gloire, amour et mort. Que me fait cela au prix de ce quelque chose en moi, si grave et si vrai?

Et quoi?

Ce lourd cheminement de larmes, dit-il, qui fait tout mon goût de la mort¹⁸⁾.

この短いエスキスだけでは、カミュがこのとき着想し始めたプロットに関して検討することは難しい。だが、この後の『幸福な死』に利用される断章に現れる「jeu」「joueur」といったテーマの出発点が、このあたりに求められるだろう。

前記カステックスが述べているように、カミュはこの後、パリにしばらく滞在した後、8月中旬から南仏オート＝アルプのアンブラン村で療養生活を送るようになる。ますます内面的な省察にふける時間と精神的余裕ができたカミュの中で小説に関する構想が膨らみ、3部構成の小説というプランが生じるのである。1938年8月の日付ヘッダを持つ最初の断章が、前章で検討された断章110であるが、

Août 37.

Un homme qui a cherché la vie là où on la met ordinairement (mariage, situation, etc.) et qui s'aperçoit d'un coup, en lisant un catalogue de mode, combien il a été étranger à sa vie (la vie telle qu'elle est considérée dans les catalogues de mode).

I^{re} Partie Sa vie jusque-là.

II^e Partie Le jeu.

III^e Partie L'abandon des compromis et la vérité dans la nature.

カステックスが指摘するように、まだカミュ自身も『ノート1-1』断章124で述べているように、「1937年8月は一つの分岐点」であり¹⁹⁾、カミュの小説創作を決定づける月だったのである。ただしそれは、『異邦人』ではなく、『幸福な死』だったわけであるが。

この直後に現れる重要な断章が115であり、ここで始めて、3章構成の内容が具体化し、『幸福な

死』への流れが見えてくるのである。

Août 37.

Projet de plan. Combiner jeu et vie.

I^{re} Partie.

A Fuite devant soi.

B M. et pauvreté. (Tout au présent.) Les chapitres de la série A décrivent le joueur. Ceux de la série B la vie jusqu'à la mort de la mère (Mort de Marguerite Métiers différents: courtage, accessoires automobiles, préfecture, etc.) Dernier chapitre: Descente vers le soleil et mort (suicide mort naturelle).

I^{le} Partie.

Inverse. A au présent: Redécouverte de la joie. Maison devant le Monde. Liaison avec Catherine.

B au passé. Pris au jeu. Jalousie sexuelle. Fuite.

III^e Partie.

Tout au présent. Amour et soleil. Non, dit le garçon²⁰).

「自己からの逃避」というテーマ²¹、「賭け／演技」のテーマ、母親の死というテーマ、陽光の地へ下っていくテーマ、自殺のテーマ、「世界を前にした家」のエピソード、「性的な嫉妬」のテーマ、そして動詞の時制の用法に関する事など、その後間接・直接に『幸福な死』を形成していく素材の原形がちりばめられている。小説という形で自分が何を表現したかったのか、カミュが自覚したのはおそらくこの時期であろう。むろん、これらのテーマは1作の小説に盛り込むにはあまりに多岐にわたっており、『幸福な死』が結局まとまりを欠いた失敗作となる原因の一つなるのではあるが。これ以降カミュは、これらのテーマをを結びつけるプロットを形成するために惨憺たる苦心を行うこととなる。そして、2-1で分析した、第1部の詳細な構成を記した断章118が現れるのが、このすぐ後であり、このようにカミュの中で小説のイメージが固まってくる流れを追うと、なお一層、断章012の後半から014が断章118の後に位置するのが自然であることがわかる。断章012～014を1936年1～2月の記述だと解釈するのは、表現行為の流れを理解しない考え方であろう。

初めて書き終えることのできた小説『幸福な死』をカミュが着想したのは、このように、1937年8月のことであった。創作の鉱脈を探り当てたカミュに、精神的な高揚が訪れる。アンブランを後にしてイタリアを旅行したカミュは、さらに陽光の地における解放感も味わい、2つの高揚感がないまぜになるまま、この地で小説のためのもう一つの鉱脈を見つけるのである。『ノート1-1』の最後を飾る断章141を見よう。

「裸になる」とは、常に肉体的な解放という意味を持っている。そして、手と花とのこの合一、大地と、人間的なものから解き放たれた人間との愛情に満ちた合意、ああ、僕は喜んでそれに

改宗するだろう。もしそれが、すでに僕の宗教になっているのでなかったなら [...]

僕は孤独であることで苦しんだ。だが、自分の秘密を守りとおせたがゆえに、孤独であることの苦しみを克服したのだ。そして今日、僕が知っている最大の栄光は、孤独のうちに、人知れず生きることだ。書くこと、僕の深い喜び！世界と、享楽に同意をすること　ただ少なくとも、無一物の状態で。もし自分自身を前にして裸でいつづけることができないのなら、浜辺の裸体を愛する資格もないだろう。初めて、幸福という言葉の意味があいまいなものではなく思える。幸福というのは、ふつう「僕は幸福だ」ということばで表すことのいわば逆のものなのだ²²⁾。

書くこと、むろん小説を書くことが、こうして若きカミュにとっての、最大の、そして内的な喜びとなり、これ以降、カミュは『幸福な死』の構想の具体化に没頭してゆくのである。そして、このイタリアにおける特権的な充足感の中から、これまで着想したさまざまなエピソードをまとめあげる小説全体のテーマ、「幸福の探求」が姿を現す。カミュにおける「幸福の探求」が目指すものは、物質的な充足とも社会的な栄達とも、あるいは愛情に満ちた人間関係の構築でもなく、孤独のうちに自己の真理を探求することで、この世界（＝自然としての世界）と個との全的合一を果たすという秘教的な試みなのである。そしてこのテーマは、『幸福な死』では結局満足できる形では表現しきれなかったわけであるが、この作品を経由して、遠く、『異邦人』最終章のムルソーの「解脱」にまで鳴り響いているのである。

（以下次号）

注

「序」の注

- 1) ...une œuvre d'homme n'est rien d'autre que ce long cheminement pour retrouver par les détours de l'art les deux ou trois images simples et grandes sur lesquelles le cœur, une première fois, s'est ouvert.
- 2) 『カリギュラ』・『異邦人』・『シーシュポスの神話』を相次いで着想し、順を追って執筆するうちに、カミュはこの3作を、不条理という共通のテーマを巡って、演劇・小説・エッセイという異なったジャンルで表現されながらも、それぞれに互いを照らし出す「三部作」として位置づけたいと考えたようになった。それゆえ、『異邦人』がガリマール書店から出版されるに際しては3作が同時に発刊されるように強く望んだが、ドイツ軍占領下の厳しい状況下ではそれは果たせなかった。
カミュはこの三部作の世界を「不条理のサイクル」あるいは「不条理のシリーズ」と名付け、引き続く「反抗のサイクル」においても演劇・小説・エッセイが相互に結びつけられる形で創作に取り組もうとしたが、第二次世界大戦と戦後の苛烈な状況の中で、作家の創作活動はたびたび中断し、また価値観や審美観の見直しもたびたびせまられた。したがって『戒厳令』・『正義の人々』・『ベスト』・『反抗する人間』の相互の関係は、「不条理のサイクル」におけるものほど緊密であるとは言い難い。また、「反抗のサイクル」に続く3部作の構想は、実現せずに終わった。
- 3) 日本では「カミュ サルトル論争」と呼ばれることが多かったが、実態は、『現代』誌、*les Temps modernes*に掲載されたフランシス・ジャンソンの『反抗する人間』批判に対してカミュが反論を試みたところ、それをサルトル ジャンソン陣営が袋だたきにした結果、批判の内容よりもむしろ精神的に傷ついたことからカ

ミュは沈黙し、その後サルトルと疎遠になったわけであり、「論争」と形容するに値しない。

- 4) 『裏と表』 *l'Envert et l'endroit* と 『婚礼』 *Noces*. 後に述べるように、これらに収められたテキストが初めからエッセイとして着想されていたかという点は疑わしい。
- 5) «Présentation de *l'Étranger*» in *Albert Camus, Théâtre, récits, nouvelles*, Gallimard, (Bibliothèque de la Pléiade), pp.1913-19 (éd. 1974)
- 6) カミュにおける「作家内テキスト同一性」の実際に関しては後述の分析を参照。また、「作家内テキスト同一性」の概念に関しては、以下に詳しい。

Briand T-Fitch, *The Narcissistic Text - A Reading of Camus' fiction* -, University of Toronto Press, 1982.

「1.『異邦人』着想をめぐる謎」の注

- 1) Pingaud, Bernard, *«l'Étranger» de Camus*, Hachette, 1971.
- 2) 継起的な事実がすべて複合過去形で記されているわけではなく、実は『異邦人』全体で単純過去形の使用は6例認められる。コンテキストから検討して、単純過去の使用に特別な意図があったとは考えられず、いわば作者の「お手付き」なのであろう。6例のうち 2 の 2 例は、後に見るように『幸福な死』からの引用部分に含まれており、書き写すときに気がつかなかったとも考えられる。フランス語を母語とする読者にとって物語が単純過去形で語られるのはあまりに自然なことであり、数多くの複合過去形の中にわずかの単純過去が紛れ込んでいても特に気になることではない(ページ数はプレイヤッド版のものである)。

Ses cheveux blancs assez fins laissaient passer de curieuses oreilles ballantes et mal ourlées dont la couleur rouge sang dans ce visage blafard me *frappa*. (p.1135)

L'ordonnateur nous *donna* nos places. (p.1135)

Un peu plus tard *passèrent* les jeunes gens du faubourg, (p.1140)

Ceux qui revenaient des cinémas de la ville *arrivèrent* un peu plus tard. (p.1141)

le bruit des voix qui rebondissaient contre les grands murs nus de la salle, la lumière crue qui coulait du ciel sur les vitres et rejaillissait dans la salle, me *causèrent* une sorte d'étourdissement. (p.1178)

Mais cela *dura* quelques mois. (p.1180)

M.G.Barrier による『「異邦人」における語りの技法』*l'Art du récit dans «l'Étranger d'Albert Camus»* (Nizet, 1966) は、『異邦人』の文体を分析した古典的著作であり、やはり単純過去の使用について言及しているが、これらのうち 2 を見落としている(同書、p.10)。

また、プレイヤッド版の注によれば、第1原稿では、第1部第1章においてさらにもう一例単純過去の使用が認められるが、これは決定稿では削除された。

Dans la petite morgue, il [le concierge de l'asile] me *demanda* s'il ne m'ennuyait pas. (p.1920)

- 3) ここ数年、フランス文学書テキストのオンラインデータ化が飛躍的に進み、インターネットでも膨大なテキストが検索できるようになっているが、20世紀のテキストは著作権の関係からなかなかオンライン化がなされず、カミュのテキストでオンライン化されたものも皆無である。筆者は個人的な研究に使用するために、現在、カミュの全テキストのOCR化に基づくデータベース化の作業を進めている。このデータベース自体は、むろん、著作権の関係から当分公表することはできないが、カミュの作品テキストのコンピュータ解析に基づく研究は随時発表してゆく予定である。

1文あたり平均15個程度の単語で構成されるというのは、フランス語による小説作品としてはどちらかと言うと少ない数値であろう。『異邦人』の発表前にこの原稿を読んだカミュの恩師ジャン・グルニエ Jean Grenier や作家アンドレ・マルローは、こうした「ぶつぎれの文体」に最初はかなり違和感を抱いたらしい。この間の事情は、カミュのまとまった評伝としては2作目に当たる、Olivier Todd による800ページを超え

る大作 *Albert Camus Une vie* (Gallimard, 1996) に詳しい。同書 pp.276-280 を参照。

『異邦人』を高く評価しながらも、マルローが付したいいくつかの留保のうち一つは次のようなものだったという。「La phrase est un peu trop systématiquement: sujet, verbe, complément, point. Par moments, ça tourne au procédé. Très facile à arranger, en modifiant parfois la ponctuation.」

4) 上記解題。pp.1916-17.

5) 『ノート』1-3・断章141(P.214) に、「*Mai. L'Etranger est terminé.*」という記載があるが、これが正しいことが前記 Todd による評伝により確かめられた。1940年5月1日付けの、のちに2番目の妻となるフランシーヌ・フォールに宛てた手紙で、『異邦人』を脱稿したむねが告げられている。作家カミュの誕生を物語るこの感動的な手紙については、(下)において検討する。

Todd による評伝は、おおむね、先駆者 Herbert Lottman によるやはり浩瀚な評伝 (*Albert Camus-a biography, Doubleday & Company, New York, 1979*) を跡付けるもので、これまでのカミュ観に修正を迫るような新事実の発見はそれほど多くはない。Todd による評伝の値打ちはなによりも、グルニエとの往復書簡以外は公開されていないカミュの往復書簡に直接あたり、それらを縦横に紹介して、伝記的事実の裏付けとしている点にある。今後、同書で利用された書簡を初めとして、カミュ書簡集がまとまった形で刊行されることが望まれる。

6) アルジェリアを離れる直前、カミュは「ノート」に次のように記している。

Mars.

Que signifie ce réveil soudain dans cette chambre obscure avec les bruits d'une ville tout d'un coup étrangère? Et tout m'est étranger, tout, sans un être à moi, sans un lieu où refermer cette plaie. Que fais-je ici, à quoi riment ces gestes, ces sourires? Je ne suis pas d'ici pas d'ailleurs non plus. Et le monde n'est plus qu'un paysage inconnu ou mon cœur ne trouve plus d'appuis. Etranger, qui peut savoir ce que ce mot veut dire. (*Carnets I*, pp.201-02)

この直後なれば追放のような形でパリに辿り着いたカミュは、かなりの *dépaysement* を味わった。その心境が、孤独な牢獄のうちで自然の中の解放を夢見るムルソーの描写に反映していると思われる。

7) 『異邦人』の執筆時期を巡る外的な状況証拠に関しては、(下)において、改めて詳細に論じる。

8) 1935年から事故死の数日前まで、カミュはノートにさまざまな覚書を書き続けた。カミュは9冊のノートを残したが、それぞれ3冊ずつにまとめられて、カミュの『ノート』*Carnets* として全3部が出版された。本来「ノート」の意味である *«cahiers»* が書名として用いられなかったのは、「カイエ・アルペール・カミュ」叢書と区別するためであるという。『ノート1』は1962年、『ノート2』は1965年に刊行されたが、『ノート3』は支障のある記述が多く、1989年まで刊行されなかった。

本論では、カミュが書きつけた際は「ノート」と表記し、出版されたテキストは『ノート』と記すことにする。また、『ノート』のテキストそれぞれのことを「断章」と呼ぶことにする。『ノート』においてはそれぞれの断章の切れ目はアスタリスクで表されているが、断章ごとのナンバリングはない。そこで、断章ごとの違いを明確にするために、本論ではカミュが記した「ノート」ごとに、1番からの通し番号をつけて表すことにする。例えば

『ノート1-2』断章133(P.141)

というのは、『ノート』第1巻の第2冊目の「ノート」における133番目の断章であり、『ノート』における頁は141ページであることを示す。

なお、カミュが残したこの9冊の「ノート」をどのような性格のものと位置づけるかは、判断が難しい。定期的な日記ではないが、創作ノートとして限定された性格のものでもない。さまざまな覚書・個人的な省察・創作のためのメモ・実際に作品に取り入れられた断章、などが混在しており、しかも時期によってその

性格が変化している。なによりも、24年間にわたって書き綴ったにしては少なすぎる冊数であり、この「ノート」に書き記すこと自体が、カミュにとって、俗事を離れて自己の内面的な世界に沈潜するための特別な行事であったのではないかと思われる。とりわけ若いころの「ノート」はその性格が濃厚であろう。

- 9) 粗雑な分析の例として、Edouard Morot-Sir による «Actualité de *l'Étranger*» を挙げよう。『異邦人』に関する最新の評論の一つでありながら、次のような『ノート』の場当たりの利用を行っている。

Que nous dit implicitement Camus décrivant la vie de Meursault partagée entre les dimanches et les autres jours? Voici quelques notations des Carnets rédigées à la même époque que *L'Étranger*: «Ce qu'il y a de sordide et de misérable dans la condition d'un homme travaillant et dans une civilisation fondée sur des hommes travaillant.» (avril 1938; CI, 106). Camus projette d'écrire un essai sur la semaine de quarante heures. En décembre 1937, il évoque dans ses notes le futur Meursault:

Le type qui donnait toutes les promesses et qui travaille maintenant dans un bureau. Il ne fait rien d'autre part, rentrant chez lui, se couchant et attendant l'heure du dîner en fumant, se couchant à nouveau et dormant jusqu'au lendemain. Le dimanche, il se lève très tard et se met à sa fenêtre, regardant la pluie ou le soleil, les passants ou le silence. Ainsi toute l'année. Il attend. Il attend de mourir. (CI, 98)

後に見るように、1938年4月の時点では、カミュはまだ『異邦人』の明確な着想には至っていない。また、1937年12月は、『幸福な死』の構想を煮詰めるか執筆を開始した時期であって、この断章は『幸福な死』に利用することを考えて記したと解釈するべきである。

- 10) Condamné à mort qu'un prêtre vient visiter tous les jours. A cause du cou tranché, les genoux qui plient, les lèvres qui voudraient former un nom, la folle poussée vers la terre pour se cacher dans un «Mon Dieu, mon Dieu!»

Et chaque fois, la résistance dans l'homme qui ne veut pas de cette facilité et qui veut mâcher toute sa peur. Il meurt sans une phase, des larmes plein les yeux.

- 11) 「死を告げる司祭」というテーマは、『ドイツ人の友への手紙』や『ペスト』を見てもわかる通り、カミュにおける妄執的なテーマの一つである。この点に関する詳しい分析は拙論を参照されたい。«Le Mythe de l'innocence chez Albert Camus» in *Études de langue et littérature françaises* 64(1994) 日本フランス語フランス文学会、160-72.

- 12) 『異邦人』のアメリカ版に寄せた序文(1955年1月8日と署名があるが、この版が刊行されたのは58年になってから)で、カミュは次のように記した。「Il m'est arrivé de dire aussi, et toujours paradoxalement, que j'avais essayé de figurer dans mon personnage le seul Christ que nous méritions.» (ブレイヤッド版 pp.1928-29 に引用されている)

- 13) カミュにおける死の妄執のテーマについては、(下)において詳しく論じる。

- 14) Pierre-Georges Castex, *Albert Camus et «Étranger»*, Corti, 1965, pp. 17-18.

以下に、「トラックのエピソード」に関する3種類のテキストを引用する(イタリックは筆者による)。カミュは から を経て を書いたわけだが、カステックスは の存在を知らなかった。

『ノート』 1-1・断章038(P.37)

Course après le camion, vitesse, poussière, vacarme. *Rythme éperdu des treuils et des machines, danse des mâts sur l'horizon, roulis des coques. Sur le camion: sauts sur les pavés inégaux du quai.* Et dans la poussière blanche et crayeuse, le soleil et le sang, dans l'immense et fantastique décor du port, deux hommes jeunes qui s'éloignent à toute vitesse et qui rient à perdre haleine, comme pris de vertige.

『幸福な死』(pp.34-35)

C'était Emmanuel, le «petit des courses». Il lui montrait un camion qui arrivait vers eux dans un fracas de chaînes et d'explosions. «On y va?» Patrice courut. Le camion les dépassa. Et de suite ils s'élancèrent à sa poursuite, noyés dans le bruit et la poussière, haletants et aveugles, juste assez lucides pour se sentir transportés par l'élan effréné de la course, *dans un rythme éperdu de treuils et de machines, accompagnés par la danse des mâts sur l'horizon, et le roulis des coques lépreuses* qu'ils longeaient. Mersault prit appui le premier, sûr de sa vigueur et de sa souplesse, et sauta au vol. Il aida Emmanuel à s'asseoir les jambes pendantes, et dans la poussière blanche et crayeuse, la touffeur lumineuse qui descendait du ciel, le soleil, l'immense et fantastique décor du port gonflé de mâts et de grues noires, le camion s'éloigna à toute vitesse, *faisant sauter sur les pavés inégaux du quai*, Emmanuel et Mersault, *qui riaient à perdre haleine, dans un vertige de tout le sang*.

『異邦人』(p.1143)

A ce moment, un camion est arrivé dans un fracas de chaînes et d'explosions. Emmanuel m'a demandé «si on y allait» et je me suis mis à courir. Le camion nous a dépassés et nous nous sommes lancés à sa poursuite. J'étais noyé dans le bruit et la poussière. Je ne voyais plus rien et ne sentais que cet élan désordonné de la course, *au milieu des treuils et des machines, des mâts qui dansaient sur l'horizon et des coques* que nous longions. J'ai pris appui le premier et j'ai sauté au vol. Puis j'ai aidé Emmanuel à s'asseoir. Nous étions hors de souffle, le camion sautait sur *les pavés inégaux du quai*, au milieu de la poussière et du soleil. *Emmanuel riait à perdre haleine*.

本論の「序」に述べた「いったん記したテキストにはフェティシスティックなまでにこだわる」というカミュの特徴は、このような実例からも明らかだろう。また の書き換えを詳細に分析すると、『異邦人』の執筆にあたって、『幸福な死』の文体から脱却するためにどれほど緻密な努力をカミュが払ったかが見て取れる。

15) この引用に関する分析は後に行う。

16) 例えばカミュは、NRF(『新フランス評論』)誌に掲載された Henri Troyat の『カリギュラ』評に反論して、次のように言明している。

Caligula a été écrit en 1938. À cette époque, l'existentialisme français n'existait pas sous sa version actuelle, c'est-à-dire athée. À cette époque encore, Sartre n'avait pas publié les ouvrages où il devait donner une forme à cette philosophie.

(ブレイヤッド版 pp.11745-46 に、キヨによって引用されている)

実際は、『カリギュラ』の初稿が完成したのは1939年であるのみならず、4幕構成ではなく3幕構成であったり、『カリギュラ』のテーマを決定づける「Les hommes meurent et ils ne sont pas heureux.」というキーセンテンスが現れていないなど、この『カリギュラ』1939年稿と実際に上演された決定稿とはかけ離れている。『カリギュラ』は1941年にいったん手直しを経た後、上演に用いられた決定稿は43年になって完成したわけであり、決定稿に対する批判に対して「『カリギュラ』は1938年に書かれた」と主張するのは、あまりたちのよくない韆晦であろう。このようなカミュの韆晦癖が、彼の作品を年代を追って研究する際に再三障害となってきた。同様に、エッセイ集『婚礼』が1945年にパリで再版されるに対して、「編集者」の名の元に、ほぼ間違いなくカミュ自身が、次のように記しているが、『婚礼』初版出版は1939年であり、テキストが書かれたのは『幸福な死』を断念して以降、38年と考えられる。

ces premiers essais ont été écrits en 1936 et 1937, puis édités à petit nombre d'exemplaires en 1938,

(ブレイヤッド版「エッセイ編」p.52)

17) 『幸福な死』は、1971年、カミュを巡る資料や論文集を刊行する叢書「カイエ・アルベール・カミュ」の第

- 1 巻として刊行された。カミュ研究家 Raymond Gay-Crosier は、『幸福な死』が資料としてではなく「未刊の小説」と銘打って出版されたことを非難している（*Albert Camus 1980*, Florida University Press.）。
- 18) 『異邦人』は一人称体の小説であるから、『幸福な死』における「Mersault」とは異なり、「Meursault」という綴りが現れるのは他人から呼びかけられたときがほとんどで、回数は極めて少なく、テキスト全体で9ヶ所にすぎない（コンピュータによる検索の結果）。作家としてはたやすい訂正であり、主人公の名前が途中まで同じだったことに過剰な意味を求めるべきではないだろう。
- 19) *la Mort heureuse* n'est nullement la matrice de *l'Étranger*: c'est un tout autre livre, auquel *l'Étranger* doit beaucoup assurément, mais qui a éclaté en quelque sorte au profit de l'œuvre future.
- 20) 膨大な資料にあたっては前記 Todd までが、『幸福な死』の着想過程に関しては通説をそのまま取り入れるだけではなく、『ノート』1-1・断章110が『異邦人』のためのメモだという判断ミスを行っている（Todd, 前掲書, pp.157-58）。なお、（下）で見るように、『異邦人』の執筆過程に関しては克明な資料の分析を行った Todd は、『幸福な死』に関しては見るべき資料の発掘を行っていない。この点に関しては、前記 Lottman の調査のほうがはるかにすぐれている。

なお、キヨが『幸福な死』の最終稿をどこまで厳密に解読していたかという点には、キヨがまとめた『幸福な死』の概略を読むかぎり、かなり疑問が残る。

Résumons brièvement *la Mort heureuse*: un vieillard infirme, un certain Zagreus, accroché à la vie de toutes ses forces, inspire au jeune Mersault, par ses confidences et ses conseils, le désir de l'assassiner, pour s'emparer de sa fortune. Mersault, dans une scène visiblement influencée par les premières pages de *la Condition humaine*, fera donc disparaître Zagreus pour être riche: «Être riche, c'est avoir du temps pour, être heureux quand on est digne de l'être.» Libre de tout remords, Mersault vit heureux dans une maison communautaire où cohabitent filles et garçons, étudiants et employés, «la Maison devant le Monde». Mais le désir lui vient de parcourir l'Europe; il s'enfonce jusqu'en Tchécoslovaquie, puis en Italie, découvrant tout à la fois sa propre solitude et la splendeur du monde. Convaincu désormais que le voyage ne procure «qu'un bonheur inquiet», il regagne Alger, y retrouve ses amis, garçons et filles, se marie distraitement avec une fort belle femme qu'il installe dans la banlieue algéroise et va retrouver de temps à autre. Mais le jour où il a assassiné Zagreus, Mersault a contrasté la tuberculose; il en mourra, d'une mort tout à la fois tragique et apaisée. («Présentation de *l'Étranger*» in *Théâtre, récits, nouvelles*, pp.1912-13)

ザグラーは、確かに最初にマルトの会話に出てくるときはメルソーとかなり年が離れているように書かれているが、それ以外の部分では「老人」として描写されてはいない。

メルソーが「世界を前にした家」に落ち着くのは中央ヨーロッパの旅の後であって、「世界にのぞむ家」から旅行に出発したのではない。

«Garçon» というのは「世界にのぞむ家」でメルソーが呼ばれているあだ名であって、複数の «garçons» が登場するわけではない。

ひそかに結婚した女性（作中ではリュシエンヌ）をアルジェ郊外に住まわせたのではなく、メルソー自身が「世界にのぞむ家」を離れてアルジェ郊外に引きこもり、そこに時折リュシエンヌが訪ねてゆく。

あるいはキヨが参照したのは最終稿の前の段階の草稿だったのだろうか。

- 21) アンダーラインは筆者が施した。原文ではイタリックにはなっていない。以下も同様である。

De 1935 à 1938 le second état porte la date de 1937, mais en 1938 les Carnets font encore référence à ce travail Camus avait entrepris de bâtir un roman dont le personnage central avait nom Mersault. Son intention était d'y représenter une certaine conception de la vie et de la mort: aussi

bien, à cette époque, se faisait-il du roman une idée qu'il résumait par cette formule (janvier 1936): «On ne pense que par images. Si tu veux être philosophe, écris des romans.» Que telle fût son intention, j'en vois la preuve dans le fait que, sitôt après, il faisait le plan de la seconde partie de son livre.

- 22) «Récit. L'Homme qui ne veut pas se justifier. *L'idée qu'on se fait de lui, lui est préférée* [c'est moi R. Q. qui souligne] Il meurt, seul à garder conscience de sa vérité. Vanité de cette consolation.» Ne voilà-t-il pas un des maîtres thèmes de *L'Étranger*?

この断章は、上述した『異邦人』に関する12断章のうちの、『ノート』1-1・断章067である。だが、これがそのまま『異邦人』の主要テーマにつながっているかという点、『ノート1-1』断章073と同様、疑わしい。ムルソーの場合、「Vanté de cette consolation.」という留保からは無縁だからである。

- 23) 原文は *Carnets I*, pp.61-62 . 本論第2章で引用を行う。

後述するように、筆者はこの断章が『異邦人』の構想に結びつくものではなく、『幸福な死』のプロットの原形だと判断しているため、『異邦人』に関わる12断章の内にはこれは含めなかった。

『ノート』はその性格から言って、断片的な記述が多く、単語の解釈に迷うことがある。「jeu」は多義語であるが、この断章の前後、特に『幸福な死』に関するさまざまな断章では「賭け」の意味で用いられていることが多い。だが、後述のカステックスは「演技」と理解している。

- 24) このカミュの言明は単なる記憶違いか、注17で述べたようなカミュ流の軽蔑か（早くも1937年から『異邦人』を着想していたとなると、早熟の天才というイメージがさらに強まる）、あるいは『異邦人』の成立は『幸福な死』の試みなしには果たしえなかったということをカミュが暗に述べたかったのか、いずれかだと考えられる。

- 25) 『幸福な死』は1937年に書き終えたというのはキヨの変わらぬ確信であったようであり、やはり彼が校訂を行った『ノート1』の脚注においてもそのことを言明している（『ノート1』p.24）。こうした勘違いが、『幸福な死』の成立を巡って数多くの研究者・批評家が誤解する原因となった。

- 26) *Le repos prolongé, la solitude modifièrent sa vision du monde, accentuèrent en lui une tendance naturelle à la sauvagerie et favorisèrent une méditation d'où devaient naître plusieurs œuvres importantes.*

- 27) 前掲書 p.15.

- 28) 前掲書 p.14. C'est à Embrun, notamment, que se précisa, dans la secousse féconde de la crise, le projet romanesque de *La Mort heureuse*, en chantier depuis longtemps et jusque là demeuré informe.

- 29) *Carnets I*, p.80. この断章の大部分は、後に、『幸福な死』第1章第4部のメルソーとザグラーの会話に用いられている。

- 30) 以下、『異邦人』の小説内容に言及するときは、ローマ数字で第1部か第2部かを、算用数字で各章を表すことにする。

- 31) Sarocchi, «Genèse de la *Mort heureuse*», in *Cahiers Albert Camus I*, pp.11-12.

La «vie jusque-là» sous-entend la pauvreté, les huit heures de travail journalier, le prosaïsme des relations sociales, autant dire un mode d'être inauthentique. «Le jeu», sur lequel les *Carnets* sont très laconiques, devrait désigner une sorte de dandysme, progrès sur la vie pauvre, brio dans la jouissance de soi, mais inauthenticité encore.

「2.『幸福な死』の成立過程」の注

- 1) 断章を記した時期に関する記述は、『ノート1』においてはほとんどが月の名前のみで、年号や日付まで記したものは、極めて少ない。そういう点から行っても、3巻の『ノート』のうち『ノート1』の部分は日記

としての性格が稀薄である。以下、断章を期した時期に関する記述を簡略化して「日付ヘッダ」あるいは単に「ヘッダ」と記すことにする。気まぐれなカミュらしく、ヘッダを入れるか入れないかは一定せず、また、断章に記した時期に関するヘッダ入っているからといって、必ずしも重要な断章とは限らない。

- 2) 『幸福な死』においても『異邦人』と同様の略号で部と章を示すことにする。
- 3) 『幸福な死』は、『異邦人』同様2部構成となっており、それぞれが5章に別れている。これらの断章に現れた素材のうち、「貧しい地区の物語と母親の死」のエピソードを除いては、第2部で用いられている。
- 4) このあと述べるような事情から、これらの断章023、030、036、038のうちどれが実際に1936年に書かれたかどうかにも疑問が残る。
- 5) 断章118は、「Mersault」という名前が『ノート』の中で始めて現れる点でも示唆に富んだ断章である。なお、「Mersault」という名は、『ノート1』を通じて計11回現れているが、「Meursault」は1回もない(コンピュータによる検索の結果)。
- 6) Todd、前掲書、p.777。
- 7) Lottman、前掲書、p.107。
- 8) 前記サロッキは、『幸福な死』の校訂者としてさすがにこの矛盾に気がつき、次のように記している。

将来『幸福な死』となるべきものについて、『ノート』の中で最初に明確に言及されているのは、「第2部」のためのものだが、これは中央ヨーロッパ旅行より後のものでしかありえない。La première mention précise, dans les *Carnets*, de ce qui deviendra *La Mort heureuse* est un plan pour la «II^e partie» qui ne peut être que postérieur au voyage en Europe centrale.

だがサロッキは断章が並んでいる順番そのものには疑問を唱えず、「第1部は、その後の1937年8月に書かれた構想にあるように、「華麗な賭け」と「貧しい地域」の組み合わせに充てられている(前掲論文、pp.11)」と解説している。断章012が1936年7月よりあとに書かれ、しかし断章の順番は正しいとなると、断章017～046の間の日付ヘッダはすべて間違いということになってしまうが、とてもありえない解釈である。あるいは前記トッドも、こうした解釈を取っているのかもしれない。

サロッキも結局、キヨの解釈を受け入れる形で、『幸福な死』の成立過程に関して次のように結論づけている。

このように、『幸福な死』は1936年から1938年にかけて着想され、構想された。初期の形においてはエッセイ集『裏と表』と同時期であり、最後の形においては『婚礼』と同時期である。Ainsi *La Mort heureuse* a été conçue et composée de 1936 à 1938. Elle est contemporaine des essais de *L'Envers et l'endroit* dans sa première forme, des essais de *Noces* dans ses derniers avatars. Lui succède la première rédaction de *Caligula*. (Sarocchi、前掲論文、pp.7-8)

こうした解釈は、カミュの創作活動における小説とエッセイ集の関わり、つまりエッセイ集の刊行が小説発表の代償行為でもあったという点を曖昧にしてしまう結果を招く。

- 9) むろん、インクの色や紙の質なども実証的に調べる、厳密に生成研究的作業が施されれば、話は別である。その作業が『ノート1-1』の原稿について行われたならば、筆者の主張の正しさが証明されるだろう。カミュの『ノート』は、少なくとも第1巻に関するかぎり、正確なバージョンが再刊行されるべきである。また、第2部に関する記述が『ノート1-1』断章115に続くとなると、断章012の前半部分は元は別の断章だったと考えるべきであろう。あるいは印刷ミスでアスタリスクが落ちているのかもしれない。
- 10) 本論第4章で詳しく分析するように、『ノート1-1』の断章090、091、092は1936年の7月の旅行の際に記され、廃棄はされずに1937年の部分に挿入されたという可能性が高い。また、これらの3断章は『幸福な死』II-2に利用されることになる。
- 11) Lottman、前掲書、p.689。ロットマンのこの指摘は、注においてという性格のためか、研究家や批評家の

目にあまり止まっておらず、相変わらず誤った年代決定を前提とした批評が相次いでおり、膨大な資料を駆使した前記トッドですら、この指摘には気づかないまま『幸福な死』の成立に関してはあいまいな記述に終始している。

12) トッドによる指摘は、前記のように「日付に誤りがある」ととどまっている。トッドは膨大な書簡の原稿に目を通してはいるが、作家のテキストの草稿にはあたらなかったようだ。

13) 強調は原文による。

Mai 35.

Ce que je veux dire:

Qu'on peut avoir sans romantisme la nostalgie d'une pauvreté perdue. Une certaine somme d'années vécues misérablement suffisent à construire une sensibilité. Dans ce cas particulier, le sentiment bizarre que le fils porte à sa mère constitue *toute sa sensibilité*. Les manifestations de cette sensibilité dans les domaines les plus divers s'expliquent suffisamment par le souvenir latent, matériel de son enfance (une glu qui s'accroche à l'âme). [...] L'œuvre est un aveu, il me faut témoigner. Je n'ai qu'une chose à dire, à bien voir. C'est dans cette vie de pauvreté, parmi ces gens humbles ou vaniteux, que j'ai le plus sûrement touché ce qui me paraît le sens vrai de la vie. Les œuvres d'art n'y suffiront jamais. L'art n'est pas tout pour moi. Que du moins ce soit un moyen. (*Carnets I*, pp.15-16)

14) カミュが1933年頃に恩師ジャン・グルニエからブルーストの作品を紹介されたというロットマン（前掲書）の記載が正しいのなら、「母親との関係」や「見いだされた時」というテーマが若きカミュに強い影響を与え、34～35年にかけて大作家のひそみに倣う試みを行ったという推測が成り立つ。フランスの文化的中心から大きく離れたアルジェリアで、貴族的生活とも無縁な、若く、貧しい疑似ブルースト！カミュは、フランス本国の文壇にとって結局一人の「異邦人」として作家人生を送らなければならないという運命を予期していただろうか。

15) 一応の完成まで至っていたという可能性も低い。

16) 1939年の『婚礼』と同様、アルジェリアのエドモン・シャルロ書店から出版された。初版はわずか300部で、その後再版されることはなかったため、『裏と表』は、1958年にガリマール書店から再発行されるまでは「幻の作品」と化していた。

17) 1936年にカミュがエッセイ以外に取り組んでいた大きな活動としては、前年設立された劇団「労働座」の活動がある。

18) *Cahiers I*, p.58.

19) «Ce mois d'août a été comme une charnière» (*Cahiers I*, p.67)

20) *Cahiers I*, p.63-64.

21) 『幸福な死』の最終稿においては、ザグラーの殺害後メルソーは中央ヨーロッパに逃避し、そこでの絶望的な心的体験からイタリアへ逃避し、アルジェ高台の「世界を前にした家」に逃避し、そこからも逃避してシュヌーアの自然の中に引きこもり、最後は「小石の中の小石」となって「幸福な死」の中へ逃避してゆく。

22) «Etre nu» garde toujours un sens de liberté physique et cet accord de la main et des fleurs, cette entente amoureuse de la terre et de l'homme délivré de l'humain, ah, je m'y convertirais bien si elle n'était déjà ma religion. [...] J'ai souffert d'être seul, mais pour avoir gardé mon secret, j'ai vaincu la souffrance d'être seul. Et aujourd'hui, je ne connais pas de plus grande gloire que de vivre seul et ignoré. Ecrire, ma joie profonde! Consentir au monde et au jouir mais seulement dans le dénuement. Je ne serais pas digne d'aimer la nudité des plages si je ne savais demeurer nu devant

moi-même. Pour la première fois, le sens du mot bonheur ne me paraît pas équivoque. Il est un peu le contraire de ce qu'on entend par l'ordinaire «je suis heureux». (*Cahiers I*, pp.76-77)

3 ページ以上にわたるこの長大な断章からは、後に詳しく見るように、『幸福な死』のテキストとして相当な部分が利用されている。また、このイタリア旅行時の高揚感は、その後、エッセイ集『婚礼』における「砂漠」*«le Désert»* で美しく描き出され、上に引用したテキストも利用されている。